

天智天皇暗殺事件

隠された帝

みかど

井沢元彦



天智天皇暗殺事件

江苏工业学院图书馆
藏书章

長編歴史推理 隠された帝^{みかど} 天智天皇暗殺事件

平成 2 年 7 月 20 日 初版第 1 刷発行

著 者 井 沢 元 彦^{い さわ もと ひこ}

発 行 者 伊 賀 弘 三 良

発 行 所^{しょう} 祥 伝 社^{でん しゃ}

〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5

九段尚学ビル

☎ 03 (265) 2081 (営業)

☎ 03 (265) 2080 (編集)

印 刷 堀 内 印 刷

製 本 ナショナル製本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。

Printed in Japan.

ISBN4-396-63017-4 C0093

© Motohiko Izawa 1990

隠された帝^{みかど}

装帧
中原達治

登場人物

五条広臣 ニュースキャスター、『オフィス5』社長

曾根信也 ABSテレビ解説委員

海堂真莉子 同アナウンサー

市原 純 五条の付き人

市原セツ 純の祖母

長谷克美 セツの甥

尾藤裕一郎 広告代理店『博通』常務

五条啓子 広臣の妻

保科 ABSテレビ報道局長

船越英美 大学院生

姥原竜剣 右翼の大立物

加賀美史郎 私立探偵

ブローグ

二人はかつて兄弟のように親しくしていた。

実の兄弟ではないが、兄、弟と呼び合ったこともある。

だが、二人は今、対立していた。

政治上の問題であり、外交上の問題でもある。

「考えを変えるつもりはないのか？」

と、兄が言った。

「ない、そちらこそ変えるべきだ。このままでは日本は滅亡する」

「馬鹿な、そんなことがあるものか、神州しんしゅうは不滅だ。おまえのような売国の言動をするものがないければな」

「何を言う、売国とは何だ。そちらの考え方こそ、この国を危あやうくするものだ」

「どうしても、考えを変える気はないのか」

「ない」

「馬鹿者め、この国難の時期に」

「国難の時期だからこそ、だ」

「敵国の手先となるのか？」

「馬鹿な、そちらこそ考えがおかしい」

「問答無用だ、もう馬鹿なことはやめろ」

「そちらこそ、やめろ」

二人は口争いから本当の殴り合いになった。不幸な事態が起こったのは、その後である。一人が死んだ。打ちどころが悪かったのかもしれない。

兄は後悔した。だが、裁きを受ける気にはなれなかった。

（死体をどこかに隠さねば——）

兄はそれを考えていた。

《1》

「ぼくは今まで、こんなことを言ったことは一度もありませんが、はっきり言わせてもらえば、彼らは人間のクズだということですよ」

キャスターの五条広臣ごじょうひろおみは、その整った細面ほそおもてにわずかに緊張の色を浮かべ、カメラに向かって言い切った。

その右側に座っている解説委員の曽根信也そねしんやも、アナウンサーの海堂真莉子かいどうまりこも、思わず五条の顔を見た。スタジオのスタッフにも緊張が走った。ただ、画面は五条の顔がアップにされているので、その様子は視聴者には伝わっていない。

夜九時からのABSテレビの人気番組『ニュース900』の生放送中の出来事だった。

八月十五日、きょうは四十数年前、日本が破滅の一手手前までいった、太平洋戦争終結の日である。この『終戦記念日』にあたり、一人の新聞記者が殺された。今月に入ってこれで二人目、通算四人目である。いずれもリベラルな視点から、戦争や天皇の問題を問い続けている記者だった。それが次々にショットガンショットガンの的まとになったのだ。

犯人は『昭和群狼団しんわぐんろうだん』と称する謎のグループだった。無防備な記者に何の警告もなく発砲して殺害し、それを『天誅てんちゅう』として犯行声明を出す。文面からみて右翼系の国粋主義者のグループであることは確実だが、その正体はまだわかっていない。

五条のコメントは、この残忍なグループへの挑戦としか思えない。

「どうですか？」

五条は曾根に同意を求めた。

曾根は一瞬言葉に詰まったが、すぐに気を取り直して、

「いや、そうですね。たしかに許されないことです」

五条はうなずくと、

「番組の冒頭でも申し上げましたが、実はきょうは、ぼくの誕生日です。昭和二十年八月十五日、ちょうど敗戦の日にはぼくは生まれました。父は、殺された名倉さんと同じ新聞記者で、その父が常々ぼくに語ってくれたことは、二度と言論の自由を失ってはならない、失われるような時代にしてはならない、ということでした。自由を封じ込めるテロは絶対に許せません。ぼくは、もう一度言います。今回の犯人は人間のクズです。ぼくはたとえ生命を狙われることになっても、最後まで犯人たちと闘い続けていくことにします」

日頃ソフトな語り口で有名な五条にしては、思い切った強い口調だった。パートナーの海棠真莉子も次のニュースを読む時、少し調子が狂った。五条の興奮が乗り移ったようだった。

定刻通り、午後九時五十五分に番組は終わった。

「おつかれさま」の声が飛び交う中、プロデューサーの吉本が顔を真っ赤にしてやって来た。

「いや、よかった、よかった。五条チャン、最高」

小太りで声の大きい吉本から発せられたのは賛辞だった。それはスタジオ全体の気分を代弁し

ていた。

「ちょっと差別用語だったかな、クズってのは」

五条は照れて言った。

「平気さ、相手が相手だからな」

「でも、あんなこと急に言い出すから、びっくりしちゃった」

真莉子が笑いながら言った。

「思い切った言い方だったね。でも、いいんじゃないかな」

曾根も何度もうなずいていた。

スタジオから報道局のニュースセンターに戻ると、そこでも五条に対して賞賛の声が浴びせられた。

「おめでとう、激励の電話が鳴りつ放しだ、さすが五条広臣だな」

そう言って握手を求めたのは、報道局長の保科だった。

「おやじの遺言を守っただけですよ」

五条は保科とがっちり握手を交わした。

「すごいなあ、ぼくも五条さんのようなジャーナリストになりたいです」

アルバイトの学生も口々に言った。

「よしなよ、照れるじゃないか」

自分のデスクについて、いつものように熱いお茶で一服した五条に、保科局長が歩み寄った。

「ちょっと話があるんだ。これからつき合ってくれないか」

あたりをはばかりる小声だった。

「仕事の話ですか。それなら昼間しましょうよ」

茶碗を置いて、五条も小声で言った。

「そう言わないよ、きょうは何でもおごる」

「しょうがないな、じゃ元上司の顔を立てるか」

「すまん、おれもいい元部下を持って幸せだ」

「それじゃ、善は急げだ。行きましようか」

言葉とは裏腹に、気乗りしない表情で五条が立ち上がった時、向こうから血相を変えて局員が一人とんで来た。

「こんなものが、今、ファクスに」

局員は五条の目の前にそれを置いた。

ファクス用紙にはワープロ文字で次のように書かれてあった。

五条広臣、次はお前を処刑する

昭和群狼団

覗き込んで真莉子が悲鳴のような声を出した。

「発信元はどこだ」

保科が怒鳴った。

「わかりません。IDが書いてないので」

局員は弁解するように言った。

通常ファクスには、発信者の名前と電話番号を打ち込む機能がある。しかし、発信者がその操作を行わなければ本文のみが相手に届く。電話と同じことで、相手が名乗らなければ発信者はわからない。

「形式は似てますね」

デスクの柳が言った。柳は警視庁記者クラブのキャップを五年も務めたベテランである。

「ワープロの書体も似ている。ただ、これまでテロの対象を名指した例はない」

柳の言う通りだった。

これまで群狼団のテロ予告状は、すべて新聞社宛になっていた。「不逞な」言動を改めない限り記者の一人を処刑するというものだ。しかも、予告状はすべて郵便で送られて来ていた。

「どのファクスに来た？」

保科が尋ねた。

「視聴者の声に開放してあるやつにです。激励の声に混ざって入ってました」

番組中に一度はファクス番号の案内がある。ABSでは視聴者の反響を知るために、専用ファクスを置いていた。

「すると、イタズラの可能性もあるか」

保科が言った。

考えられないことではなかった。群狼団のテロ予告状は、新聞や週刊誌に何度も載せられている。ワープロで真似するのは難しいことではない。

「そうよ、きつとイタズラよ」

真莉子がほっとしたように大きく息を吐いた。

柳は首を振って、

「そうかもしれんが、一応は警察に届けておいたほうがいいな。こいつは一つのニュースだし——」

「そうするんだな。うん、勇氣あるキャスター五条広臣にテロの魔手が伸びるか、こりゃいける」

保科は自分で自分の言葉にうなずいた。

「馬鹿げていますよ。こんな紙切れ一枚で大騒ぎするなんて」

五条は苦笑しつつ言った。

「いや、用心に越したことはないと思うな。なにしろ奴らは普通のモノサシで測れる人間じゃない」

曾根の言葉に皆が賛成した。

早速、警視庁クラブを通じて通報がなされた。五条は、夜十一時からのニュースのキャスター吉富よしとみにインタビュウを受け、感想を述べた。警視庁の係員もやって来て事情聴取をした。

すべてが終わったのは十二時過ぎだった。

五条はアシスタントの市原純いちハラジュンに言った。

「車を『むろ田』に回しといてくれ。局長と一杯やることになってるんだ」

「送りますよ」

純は背の高い、ジーンズのよく似合う二十四歳だ。一年前から五条の事務所『オフィス5』ファイブで働いていた。今のところは五条のマネージャー見習い、と言えは聞こえはいいが、実態は付き人兼運転手といったところだ。

「それぐらい歩けるよ」

五条は、書類をカバンに詰めながら言った。『むろ田』は局の玄関を出て、大通りを二分ほど歩いたところにある。

「でも、狙われているかもしれない」

純は言った。

五条は手を止めて純を見た。

「本気で心配してるのか？」

純は白い歯を見せて、

「いえ、全然」

「全然はひどいな」

カバンを持つと、五条はエレベーターで一階に降りた。玄関のところに真莉子がいた。

「一人で帰るの？ 危ないじゃない」

真莉子は本当に心配そうな顔をしている。

「そこまで行くだけさ。あとは車がある」

「道路で襲われないっていう保証はあるの？」

真莉子が言うと、五条は真莉子の耳元に口を寄せてささやいた。

「君の愛情が本物だという保証はあるのか？」

真莉子は顔を赤くして、

「バカ、聞こえるわよ」

と、あわてて叫んだ。

「そっちこそ声が大きい」

五条は少しもあわてず、軽くたしなめただけで玄関から外へ出た。

真莉子は後を追うでもなく、五条をそのまま見送った。